

解放後の李泰俊

三枝, 壽勝

<https://doi.org/10.15017/2231014>

出版情報 : 史淵. 118, pp.127-158, 1981-03-31. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :



解放後の李泰俊

三 枝 壽 勝

李泰俊の作品を統一的に扱おうとする際、問題になることとして、まず彼の短篇と長篇をいかに結びつけるかという点、および解放後の彼の處身の仕方意外とそこで書かれた作品の性格をいかにとらえるかということが挙げられる。前者についてはすでに扱ったことがあるので今回は後者に焦点をあて、合わせて将来彼の作品を総合的に考察するための準備作業としておきたい。ただし解放後の彼の経歴および作品については不明な点が多いので自ずから制約された範囲でしか扱いえなかった。

一

一九四五年八月十五日、ポツダム宣言受諾による日本の無条件降伏は植民地朝鮮の独立をもたらすはずであった。しかし三十八度線における軍事境界線の設定と南北の分断、米ソ両軍の南北進駐は朝鮮の進路を大きく狂わせてしまった。感激と興奮はやがて政治的混乱へと引き継がれ、情勢は目まぐるしく慌しい様相を示す。左右の対立を軸とする政治的激動は大多数の朝鮮人を巻き込み朝鮮戦争にまで至るが、いずれにせよ八・一五当初の興奮の中で各分野における動きは迅速かつ活潑であり文学者達もその例外ではなかった。

八月十六日にはかつてカップ（プロレタリア芸術家同盟）の主導者であり後に転向、日本に協力した経歴を持つ金基鎮・朴英熙さえもが「新たな仕事」を始めとし、白鉄になだめられたという。⁽¹⁾同日、鐘路の和信ビルに「檄！」

全文学人に告ぐ⁽²⁾なるビラが張りだされ新たな文学運動への結集を訴えていた。訴えに応じて催された翌日の会合には尚虚 李泰俊の姿も見られた。彼は故郷江原道の疎開地で十六日の午後になってやっと日本の敗戦を知り、この日ちょうど上京してきたところだった。韓青ビルの前で彼に会った時のことを白鉄は次のように回想している。

▲尚虚のように冷い性格の持主でさえも、この日の態度は興奮し気分がさわつきようは一通りではなかった。その時の言葉の中で今だに自分の耳に残っているのは、「わたしもこれから回顧的な感激調の文ではなく未来を見透す大ロマンの大作を執筆する野心を持っています。」という抱負の言葉だった。⁽³⁾ V

しかし彼の▲大ロマンの大作 V はなかなか世に現れなかった。彼がその後活躍したのは創作ではなく文学者の運動においてであった。すなわち上記文人の集まりは「朝鮮文化建設本部」として結実し、八月十八日に第一回中央協議会が催され、李泰俊はこの「文化建設本部」傘下の「朝鮮文学建設本部」の中央委員長に推される。以後彼は解放後の激動の中で講演会に、会合にと忙しく活躍する。例えば四五年九月二十九日在外罹災同胞救済をかねて鍾路基督青年会館で開かれた解放記念文芸大講演会では司会とともに「国語と文学」なる講演も行っている。⁽⁴⁾

解放後できた左翼系の文学団体としては、この「文学建設本部」に一足おくれて「朝鮮プロレタリア文学同盟」が九月十七日に発足し互いに対立していたが、十二月十三日に合同総会を開き新たに「朝鮮文学同盟」として発足することになる。「文化建設本部」事務室で開かれたこの合同総会において李泰俊は韓暁と共に経過報告を行い、新たに結成された文学同盟の副委員長に就任する。この会合の決定に従って翌年一九四六年二月八・九両日にわたって開催された第一回朝鮮文学者大会において彼は執行部の一人として議長をつとめるとともに「国語再建と文学家の使命」なる報告を行い、さらにこの大会で正式発足する文学家同盟の副議長として再任される。⁽⁵⁾ 同年二月十五、十六日に共產党、人民党の主導のもとに開かれた民主主義民族戦線（民戦）結成大会には七名の文学家同盟の代表の一員として参加、議長団の一人に加わるとともに民戦の文化部次長に就く。さらに三月二五日には新たに創刊された『現代日

報』の主幹に就任する。⁽⁶⁾

李泰俊のこれらの動きは解放前の彼に対する印象を一変するものであった。

△(……)八・一五を契機に氏の思想は一大変革を起した。変革された思想が真に民族を愛する結果となるかという点に関しては議論が区々たるものとなるうが、いずれにせよ民族的な転換期に処しこれまで保ってきた自己のみの小世界の旧殻をなげすて濁流の中に進みでたのは確実に一大飛躍である。はたして氏がこれから作品行動においていかなる方向に流れて行くかという点は見守って行かねばならぬだろうが、作家的気質からみて氏が民族意識を放棄することができぬだろうことは今からでも断言できる。⁽⁷⁾ V

ともいわれたが、一方、いわゆる民族派の側からは相当に目に余るものと思われたらしく、

△だいたい尚虚はいつかから政治にあのような野心を持っていたのか？尚虚論の中心課題となるほど彼の政治への深入りはいささか文壇の話題になってきた。過去日帝に積極的に協力したというのではないが、それでも身辺の脅威から小心就就として「大東亜戦記」なるものも記述し「朝鮮文人報国会」にもしげしげ通っており消極的ながら妥協していた尚虚だ。しかるに八・一五以後はすっかり嵩にかかってまさに何か節を守り抜いた志士(本当の志士はそんな風に浅薄ではないが)然として並の人間には路上で挨拶も交さず……。⁽⁸⁾ V

となじられもするのであった。

さらに解放後の彼の転換を決定的にしたのは、彼が三十八度線を越え北に渡ってしまったことである。彼が北に渡った日時ははつきりせぬが、少くとも一九四六年七月から八月上旬までの間であることは確かである。⁽⁹⁾ 彼が他の越北作家といわれる多くの作家よりも早い時期に北に渡っていることは注目されるべきことだろう。北に渡ってから彼は直ちにソ連訪問の旅に出かけている。すなわち訪蘇文化使節団の一員として李燦・李箕永・許貞淑等随行員を含めて二十七名の一行に加わり、一九四六年八月十日から十月七日にわたって約二ヶ月間ウォロシコフスクを皮切りにモスクワ

・レニングラードなどを旅行して帰る。⁽¹⁰⁾ その旅行記は翌年『蘇聯紀行』として出版される。

その後一時彼は海州にいたといわれる。そこには逮捕令を逃れて南からやってきた共産党の巨頭朴憲永がおって地下運動の指揮をしていた。⁽¹¹⁾ 李泰俊は権五稷・朴致祐・鄭在達・李源朝などと共に朴憲永の秘書役を務めていたというのである。⁽¹²⁾ すなわちこの時点で李泰俊は再び南には帰れぬ境地にあったのである。⁽¹³⁾ 以後彼の経歴についてははっきりせぬことが多いが、少くとも表面的には優遇されており、文芸総（北朝鮮文学芸術総同盟）の副委員長をつとめている。当時政治的理由から北に逃げてきていた政治家・文学者は多かったが、北における彼等の地位は極めて不安定だった。李泰俊も例外ではなかったはずだが、一九四八年三月から「労働新聞」の主筆になっていたソ連系二世の奇石福によって李泰俊の文学が高く評価されたことがあったらしい。

一九五〇年六月二五日に勃発した朝鮮戦争の際には李泰俊も従軍作家団に加わりソウルに南下⁽¹⁴⁾、さらに洛東江前線にまで従軍して帰りソウルで戦果報告を行っている。⁽¹⁵⁾ この戦争における南北の攻防はすさまじいものだったが、一九五〇年九月国連軍の仁川上陸による戦線の北上と中国軍参戦による翌年初めの戦線南下の時期のある期間彼は避難せずに平壤の郊外に留まり、密かに南側に帰順の意を伝える。彼を惜しむ作家崔泰応や当時韓国国防軍政訓局に所属していた鮮干輝によって李泰俊救出作戦が試みられるが、結局彼の愛人とその子を南下させるにとどまったという。⁽¹⁶⁾

一九五三年七月二七日板門店で休戦協定が調印されるが、この時期すでに北ではいわゆる南労党（南朝鮮労働党）系の粛清が始っていた。⁽¹⁷⁾ 李泰俊はこの時の批判を一旦は免れるが、一九五五年の末公式に批判を受けることになる。この結果彼は咸南日報社の校正員として追放されるが、一年もたらず咸興コンクリートブロック工場に屑鉄収集労働者として強制配置される。この当時の彼を目撃した一人は次のように述べている。

△そうした尚虚に私が北で会ったのは一九五八年の初め、咸興コンクリートブロック工場の裏庭であつた。

その時、その裏庭は屑鉄収集場として使われていた。屑鉄収集労働者として自分の名前が印された立札が立てら

れている屑鉄の山のそばにやぶれた作業服姿でわびしげに立っていた尚虚の姿が今も目に浮ぶ。⁽¹⁹⁾ V

一九六四年頃には、中央党文化部（対南心理戦参謀部）創作第一室専属作家として召喚され平壤に戻ってきたといわれるが、⁽²⁰⁾ その後の彼の消息はさだかではない。

なお彼の息子李有白についてであるが、彼も父と共に北に渡り朝鮮戦争に従軍、一九五四年除隊の後、金日成総合大学哲学部に入学し四年間学ぶが、父の件で卒業できず黄海道鳳山郡大龍里の協同農場に追われる。父親ゆずりで文学に志をいだき一九六四年三月頃自作の短篇を二篇もって上京、発表を依頼するが反動作家の息子ということで許可されなかったという。⁽²¹⁾

二

以上の経歴についていくつかの問題点を検討してみたい。

まず、解放直後彼が政治に関与したことについてである。この事実をもって彼の行動選択の正否を問うのは意味がないであろう。この時期は文学者のみならず多くの朝鮮人を巻き込んだ政治優位の時期だったのである。彼の加担した陣営をもって、八・一五を境にして李泰俊の思想が変貌をとげたという断定もひかえない。特に結末を見てしまった上で彼の行動選択の軽薄さを指摘するのは安易である。たしかに文化建設本部を主導した林和はかつてカップの中心人物であり共産党と密接な関係をもっていただけに文化建設本部の運動が共産党との関係を抜きにしては考えられなかったのは事実であつたろうが、しかしその発足当初は大分おもむきを異にしていたと思われる。八月十六日に出されたという文学人に告ぐ檄文にせよ、その後に出された朝鮮文化建設中央協議会のビラにせよ、その内容は朝鮮の独立を祝し新たな朝鮮文化の建設をめざして作業にとりかかることを訴えるものであった。⁽²²⁾ 八月十七日に催された準備会の雰囲気も人従来の文壇派閥関係とか交友関係の遠き近きは問題にならず、ただ文壇全体が一行に大行進をす

るのだという共同戦線のごときものがかもしだされていたV⁽²³⁾というのが中っているであらう。これは林和等の主導者の巧妙な戦略によるものだというよりは、彼等をめぐる人間関係によるものが大きかったと思われる。林和自身についていえば、彼がこうした態度ですまされなくなったと感じたのは、おそらく白鉄も指摘するように朴憲永にひきいられた共産党の活動が表面に出、さらに文学建設本部に対抗して「朝鮮プロレタリア文学同盟」が名乗りをあげ過去のプロレタリア文学運動を継承する正統派であることを主張するにいたってからであらう。⁽²⁴⁾その後の林和の主張にはこの点を裏づけるふしがない。⁽²⁵⁾

その後において、李泰俊としても自分の関わっている運動がいかなる位置づけをされているかに無知であったとは思われぬ。創作を一向にせず政治に関っていることに対して彼は彼なりに釈明を用意してはいた。

△過去朝鮮の文化を俎上にのせていた日本の武力の前で朝鮮文学を正面からなしえなかった微弱な私は八月十五日以後ただおとなしく書き出す何物もなかったのだった。

「政治に関与せず文学者らしく……」^{マ・テ}こうした忠告も聞かされた。私自身、政治その中に關係してゆく意思は秋毫もない。しかし今こそできずにいたことが恨となった「生活の文学」を願いかなってなす時がやってきたにはきだが、生活意識とはすなわち政治意識である現在において政治の動向に無関心であつては、やはり私としてはこれからの文学行動を保ちえないというのも率直な告白である。〔……〕

朝鮮語文の命脈扶持にすぎなかった私の過去の作品の大部分は一見自適消遣のようであつたが、少しでも親切心を持った読者なら、私としてはやはり苦悩の象徴であつたことを理解してくれるはずと信ずる。〔……〕今や我々は芸術のみで苦悩する時ではない。芸術家であれ政治家であれ民衆の指導者であるのは同じである。最善最真の方向を求め深思熟考すること、求めた次には正々堂々たる作品行動で民族革命を推進させるに第一線の役割りを果さねばならぬのも政治家と同様なのである。〔……〕したがってこれから我々芸術家の芸術観は我々の政治家の政治

観と同一理念のものであり、ゆえに我々の文学はことさら国民文学を標榜せずとも自から国民文学となりうるのである。今日我々芸術家として政治に無関心であるというのは結局は自己の芸術に不誠実だということを反證するだけである。〔……〕

しかし我々は作家である。一場の述懐は一篇の作品に比べれば何ものでもない。最も誠実な作品を通してこそ、作家の語ることを最も正確に表現するのは彼の作品であるのみである。しかしこれも託治問題が起る前の考えだ。我々は再び、いや今こそすべての力が対外的にのみ放射させずにはおかれぬようになった。⁽²³⁾ V

急いで書かれたらしいことと、当時の新聞のこととて意味の通じぬ所があるのはやむをえぬが、当時の彼の社会に對する姿勢をうかがうには充分である。ここで文学者としての李泰俊が政治に関わる根拠は何も明らかにされていない。八生活意識とはすなわち政治意識 V というのは要領をえぬ。要するに作家としては作品によってのみ自己を世に問うるのだが現在はそのが可能な情勢でないこと、さらに彼自身の政治への関心が決して今に始つたのではなくそのことは植民地時代の作品をよく読んでもらえばわかるはずであることが述べられているに過ぎない。⁽²⁴⁾ 政治に八関係してゆく意志は秋毫もない V という但書きは非政治家の政治への関与を語る際の決り文句である。政治・文学いづれから攻められても他方に身をひきうる構えである。状況の要請によりやむをえず政治に関つているのだという理由づけが彼を文学家同盟副委員長の地位にとどまらせたのであろうか。これについては後に再度検討する。

次に彼が三八度線の北を選んだ動機については種々議論の焦点となるところであるが、その真相は分りにくい。ただ他の多くの作家達が政治情勢から北に逃れざるをえなかった点と比べると彼の場合は少くとも自らの意志によって北に渡つた面が強いように思われる。この点に関して、李泰俊は、かつて自分と親交があり種々の援助を受けたことのある恩人が人民裁判で苦境に陥っていたのでその助命運動を行うために渡つたのだという話がある。⁽²⁵⁾ 李泰俊を惜しむ者にとって信じたくも思われるであろうし、また越北後の彼がそうした助命運動をした時期があつた可能性は否

定しきれぬ。しかし彼がそのためにのみ北に渡り、ある期間助命運動に身を投じたとするには、越北の時期およびソ連旅行の時間関係から納得し難いと思われる。彼を擁護する者にとっては意に満たぬ点があるにせよ、ここでは白鉄の言うようにソ連行きのチケットを誰よりも先に手にしたこと、および林和との交友関係により平壤行きの推薦を受けることができたことが直接の動機と考えるのがむしろ真相に近いかも知れない。⁽²⁹⁾

もちろんこれだけでは李泰俊が北に渡る動機を説明しつくしたことはない。ただ解放後に彼がとってきた行動から考えると、彼が南で活動するのに不自由を感じていたこと、および当時の李承晩と米軍の極端な反共政策に幻滅を感じ南に見きりをつけたのではないかということは推測される。すなわち李泰俊のみならず多くの作家達を北に追いやり、やがては彼等の多くが肅清される運命に追い込んだことには南側での政治の責任があったということである。すなわち白鉄が言うように、

「〔…〕当時あのように多くの人材を失わせたのには我が政府を樹立する大きな歴史的転換期の人情勢を前にして文化政策的に彼等を寛大に包擁する手をさしのべられず彼等を孤児のごとく棄てやった責任がありはせぬかと思われる。その中でも例えば李泰俊のような作家はよく知られているように日帝時代にプロ文学派と正面对立をしていた民族的な抒情の作家としてその体質からみても共産主義の作家になりえない者だったのだ。」⁽³⁰⁾ V

ということであり、彼の北行きを煽った背後には、南側の過渡政権の腐敗した現実に対する作家的な潔癖性が不満をいだかせたV事情があると思われるわけであるから、南側には意外とこちら側〔南側〕の現実と文化政策の貧困にも責任があったという事実Vを無視できなくなるといえる。⁽³¹⁾ しかしこの発言はあくまでも現在南に生きる者が自分達の過去をふり返り反省する言葉である。これをもって文学者としての李泰俊の越北や、しいては解放後の彼の行動を正当化する根拠にするのは保留したい。李泰俊をはじめとして北に渡った多くの者達は現在南では民族叛逆者として処理されているが、これは個々の事実の責任を個々人に帰す近代国家の法体系の枠内のことである。彼等が北で肅

清されたことをもって彼等の行動の誤謬を指摘したり、当時の南の情勢を理由として彼等の行動を正当化したりはできぬだろう。彼等の行動は二者択一が不可能な状況で一方を選択することを強要された結果生じたものにすぎない。

一方現在、北において李泰俊はハ米帝國主義のやとわれスパイ朴憲永・李承燁一派の手先⁽³²⁾として林和、金南天とともに反動作家の扱いを受けている。次はこの経緯について簡単にふれておこう。彼らの悲運は当然朴憲永等政治家の肅清に直接関連しているが、文学者としての彼等にはまたそれを支えていた要因がいくつか加わる。特に李泰俊の場合、解放前の文学の傾向や彼の経歴からみて、いわゆるプロレタリア文学を標榜する者から心よく思われなかったはずであり、さらに一九四五年十二月の文学同盟発足当時のいきさつが⁽³³⁾しこりを残していて時折彼らに対する攻撃となつて表面化したという。南出身の作家達は北では余計者ないしは警戒される存在であつた。こうした雰囲気の中で李泰俊、金南天などを極力支援していたのは奇石福・鄭律・朴昌玉などのいわゆるソ連系二世達⁽³⁴⁾だつた。特に「労働新聞」の主筆であつた奇石福は朝蘇文化協会主催の講演会で李泰俊論を論じるほどで、「からす」、「月夜」、「桜は植えたが」などの植民地時代の作品や越北後の作品「ホランイ姿さん」などを高く評価したという。⁽³⁵⁾こうしたソ連系二世の支援の背景には金日成を中心とする甲山派とソ連派の対立があつて南出身の作家はその政治的抗争に利用されたのだという話がある。⁽³⁶⁾この二派は共に、派閥抗争に明け暮れる既成の共産主義者を嫌つたソ連によつて積極的に支持され、初期の北の政治で中心的役割りをはたしたグループである。⁽³⁷⁾もしかすると李泰俊は初期において彼らに期待していたか、または南出身の人物達とある距離を保っていたのかもしれないがこの点については確証はない。⁽³⁸⁾いずれにしても林和、李源朝らの裁判で李泰俊や金南天の名が挙がりながらも、⁽³⁹⁾彼は無事に免れ、彼が批判を受けるのは一九五四年初め頃からで、一九五五年末には彼に対する批判は確定的になる。これはソ連派の没落と時期を同じくしている。⁽⁴⁰⁾

こうして現在李泰俊は南北において公に扱いえぬ作家となつて久しいが、しかしながらこうした政治優先の文学史

の記述がそのまま放置されているわけではなく、それを克服しようとする試みは断続的になされつつ今日に至っているのである。⁽⁴¹⁾

三

李泰俊が解放後に発表した小説は、まず越北前に書いたものとしては「解放前後——ある作家の手記」（一九四六・三・二四執筆）および未完の長篇「不死鳥」（一九四六・三・二七—七・十九）が知られている。その他に短篇「祖国」の予告が出されたことがあるが彼の北行きのため発表されずに終わったようである。⁽⁴²⁾ 北に渡ってからの作品には長篇『農土』（一九四八）、「初戦聞」・「ホランイ婆さん」・「三八線のある地区にて」（一九四九）、「アメリカ大使館」・「埃」・「二つの屍体」・「百倍千倍」（一九五〇）があるといわれるが、最後の二篇は報告文学らしい。⁽⁴³⁾ その他では『蘇聯紀行』が一九四七年に出版されている。

李泰俊が解放後約半年の間小説を発表できずにいたことは前述の通りで、他ならぬ彼自身も氣にかけていて弁明も行っている。彼がようやく構想を語ることができるようになったのは一九四六年に入ってからであった。

△何よりもまず小説を書け。

これは編輯者の要請というより私自身の要請だった。小説のため苦しみ、小説のため喜びを感じたいのは作家たる私にとって念願の全てなのだ。いかなる苦楽も小説のためでなければ私には無意味なのだ。

なによりもこの解放の喜びを創作の中で味わいたく思うのは私の持ちうる最大の幸福なので今も大切にしているものである。「……」私が今度こしらえて見ようというその小説のために私は次のいくつかの項目を念頭においてみた。

一、取材は民族共通の問題からであること。この点は避け難いだけに、どの作家にもこれから先当分は一番自然

なものである。生活であれ、運命であれ、闘争であれ、個人的なものが考慮される余地のない今日は最も民族的な時期だからである。二、啓蒙的であること。啓蒙には二種がある。第一、思想面である。我が民族というより我が読者にこの時期ぐらい思想を要求する時はない。何が毒でありなにが蜜であるかさえ区別できずにさ迷い、そのため我が民族の最後の悲願たる統一戦線が日増しに複雑多端になって行くばかりなのだ。この点においては我々作家自身からして同一路線に立たねばならぬのはもちろんである。第二、国語国文の普及面である。生活語・俗語が最も多く登場するのは戯曲と共に小説であるから民衆の実地用語・用文に最も多く影響を及しうるのは小説である。この点では作家達は教育的任務も自覚して民族の言葉を整理して洗練し向上させるに周到な用意を持って進まねばならぬのである。三、芸術であること。今度はたとえ「我々の時局」であっても「時局小説」に終つてはならぬのである。いかに巨大なものであれ民族的問題を提示するに終つたり、完全なものであれ啓蒙教本の任務のみでは「文化」の運動ではあれ「文学」の運動ではなく、ましてや「文学の建設」ではないのだ。因はこの時局であるが果は永遠なる生命の誕生であつてこそ芸術であるのだ。⁴⁴ V

具体的な作品の構想というにはいささか抽象的にすぎるきらいもあり、現実の政治的課題にかかわりすぎた発言のようにも感じられる。しかしここで挙げられた三項目そのものは決して解放後になつて初めて彼の念頭に浮んできたものではない。民族・啓蒙・芸術の三つを柱にすることはつとに彼の唱えてきたところであり、その常識的な水準での提出の仕方だってはいない。しかしいかに漠然としてはいてもその提唱が意義を持ちえた植民地時代とは状況の異なる解放後においても依然としてこの程度に留まっていたところに彼の限界を見ることが出来る。この時期、作家としての李泰俊にとって最も危険なことは創作の不振それ自体にあるのではなく、その不振の原因を他に帰すことにより自己を合理化してしまうことであつた。前節の引用文でもその傾向をうかがうことができたが、上記の文では自己の關っている政治がこれからの創作の課題に結びついているのだという形で自己の合理化を図っている。

ここで李泰俊が彼の意図をいかなる形で作品にあらわしたかを見ておこう。

長篇「不死鳥」は未完に終わったが、彼の解放前の作品に直接つながりうる小説である。⁽⁴⁵⁾ 話は二〇年代の初めに始まる。専門学校の卒業をひかえながら主人公鄭如蘭は心晴れなかった。亡き母の思い出も未だ消えうせていないのに最近父の再婚話が進んでいるのを知ったからである。こうした彼女を級友の玉萬が兄達「白潮」同人の集りに誘う。如蘭はここで以前散歩の道すがら姿をみかけた画家金正業に会う。結核で静養中の正業は如蘭に心魅かれる。彼女も正業に母の肖像を描いてもらうことをたのむが、そうこうするうちふとしたことから如蘭は彼に体を許してしまう。その後父の再婚を嫌って家を出、開城の小学校に勤めるが、体の異常に気づき辞職。ソウルに戻り玉萬の世話で男児を出産。しかし玉萬は如蘭の将来を思っで密かに如蘭の子をある家の養子に入れその居所を教えなかった。一方以前から如蘭に好意を寄せていた玉萬の兄昌萬はそうした彼女に求婚するが、彼女はそれを感謝しつつも当分一人で生きる決心で断わり、仁川の女子中学校英語教師として赴任する。その間も我が子のが気がかりであったが、遂に子供が尹得孫という名で育てられていることをつきとめた彼女は保育学校に通い、その子の家の近くの幼稚園に就職する。得孫を自分の通う幼稚園に入れることに成功してから後、たとえ本人には母であることを名乗らぬにせよ母親の情をもって彼の世話をし、その過程で自分がいかに自民族のことに無知であるかを悟らされる。そして得孫を民族の子として育てるために学ぶ決心をし、書物を買ひ童話作家方定煥の話を聞きにゆく。

作者の越北により物語はここで中断されているが、小説の構成は以前の作「聖母」に似ていることが容易にわかる。むしろ改作に近いかもしれぬ。この小説における鄭如蘭・金正業・昌萬はそれぞれ「聖母」の安順慕・朴正賢・金尚詰に当たる。したがってこの小説における人私生児の母Ⅴと人民族の母Ⅴの同等性という主題は「聖母」に通じるものとみなしてよい。「聖母」と比較してみられる構成上の変化は、正業と昌萬をめぐる三角関係がないこと、正業が如蘭の出産前に死亡していること、唯一の肉身だった父親とは絶縁していることなどであるが、この結果一人で

生きる如蘭のひたむきな若き母の母性愛の描写を正面に出すことが可能になった。この点は、孤独さ、寂しさや葛藤の記述が希薄になったことと合わせて作者の側に生じた変化を反映していると思われる。すなわち逆境の中で悪戦苦闘を強いられた当時とは作者自身の境遇も時代も変っているということである。解放前の植民地支配下においての民族意識には必然的に緊張関係が伴ない、それが強力な自己確認の拠り所となったのは事実であろう。しかし解放とともに民族意識の帯びていた意義も変質せざるをえぬ。△私生児の母▽として母親であることを名乗りえぬまま我が子の教育にひたむきになる如蘭は、解放後の朝鮮を担う若者を当然育ててくるべきはずであつた△民族の母▽なのであつた。

だが一方解放は、たえず反発と嫌悪で迎えられた李光洙流の言説に対して、彼の真意は別にしてもその言説の意味が再検討される可能性をもたしたのである。

△おれたち内地人は子供を殴るなんてことはせぬ。だが、お前たち朝鮮人は道に引きずりだしてまでしてから燃えさしの薪でもって殴るのをおれたちは毎日見てゐる。だからして、おまえたち朝鮮人の子供達は口で言つたつてだめで、ぶんなぐらねば効果がないつてのをおまえたち朝鮮人の親が証明しているんじゃないか？▽

これはささいなことから朝鮮人の子供が殴られるのを目撃した如蘭がたしなめた時、殴っている日本人学校の教師が投げ返す言葉である。この言葉には二重の意味付けが可能である。一つは植民地支配者が植民地の人間に対して持っていた態度習性を表現しているということであり、もう一つは植民地支配者は植民地の被支配者の習性に合わせて態度を形成するということである。後者に関してはおそらく植民地時代に問題にされうるなどとは考えられもしなかつただろうが、解放後においてもこの問題はわずらわしく複雑な反応を引き起すだろうと思われる。問題は相互の作用関係として一般化されうるにもかかわらず現在も依然として不問に付されているようである。李泰俊自身上記の言葉にどれほどの深みを与えていたかは不明だが、⁶⁹ 少くとも「聖母」において順慕が我が子と思わず殴つた件りより

も一步進んでいると思われる。だが、ここではこれ以上この問題に立ち入ることは避けたい。

この作品の後半は△私生児の母▽から△民族の母▽へと成長してゆく如蘭の姿を描くはずだったと思われるが作品が中断されているのでそれを知るすべはない。ところで「不死鳥」においても「聖母」と同様に依然として△民族の母▽がなぜ△私生児の母▽でなければならなかったのだろうか。如蘭は「赤い鳥の会」主催の童話童謡の会に行き日本人達の会の進行の自由な雰囲気をも自分達の会合の雰囲気と比べてみる。そして思い至る。△得孫の不幸が母親のもとを離れて他人に育てられていたというそんな家庭的条件でかわいそうだけでなく、それ以上何倍にも朝鮮の子供だからかわいそうだということ▽に。得孫も朝鮮の子であるかぎり△民族の子▽としての不幸を背負っているというのである。しかし得孫の不幸は△民族の子▽としての不幸に還元し尽されるものではなかったはずである。李泰俊の民族をあやつる手際が鮮やかなだけそこに何らかの作爲を感じさせる。そこには「影」、「妹」から「聖母」を経て「三姉妹」などの作品系列から感じとれる李泰俊自身にとつての何らかのこだわりが依然として余韻を残しているのを見ることができると共に、その扱い方がかなり整理されてきているのがわかる。そこにみられる合理づけの意味は「不滅の喊声」や「思想の月夜」の主人公のものとは性格を異にしているのである。

次に扱う、「不死鳥」の連載中に発表された短篇、「解放前後」は彼の解放後の作品としてはよく知られた作品である。⁴⁶この作品における△△という主人公はすでに「兎物語」や「浪江冷」など作者の心情を表現する作品に登場するので、この作品においても作者に近い人物とみなしてもさしつかえなからう。「解放前後」は題名の通り作家△の解放前後における生き方を扱っている。

戦争末期の△の生き方は時局に対して消極的に可能な限りの非協力というものであった。創氏改名や時局物・日本語の創作は拒否しながら、さりとて大東亜戦記の朝鮮語訳や文人決起大会への出席を拒絶するほど堅固な態度でもなかった。あと幾日ももたぬ日本の敗戦を待ちながら不安の内に△ただ生きたいというよりは生きることの堪えぬき▽

たいという思いで過してきた。そうした彼にとつての慰めは人目を忍んで行く釣りと、郷校の金直員との対話だった。夢のように思われた日本の敗戦を一日おくて知り感激の涙を流した玄は十七日の朝ソウルに着く。最初に見たソウルの状況は玄にとって不愉快なものであった。△総督府と日本軍隊が依然として朝鮮民族に命令を下して居坐っていること▽、いちはやく△勝手な建国計画が進められていること▽、△はやばやと旗幟をかかげ部署を定め飛びまわっている▽左翼作家達のことを氣にくわなかった。ところが△はなはだ不純で軽はずみに思われた▽作家達の運動の中に玄も身を投じる結果となってしまう。作品の後半は「朝鮮文化建設本部」に参加し「文学建設本部」の責任者として行動する玄の姿を描いている。その内的な根拠はどこにあったのだろうか。

△玄のこれまでの作品世界はたいい身辺的なものが多かった。好んで限界を身辺的なものにおいたわけではなかったが、階級よりも民族の悲哀に一層率直だった彼は階級に偏向していた左翼にはむしろ反感を持っていたし、だからといって日帝の朝鮮民族政策に正面衝突で飛びだすには玄のみならず朝鮮文学の陣容全体があまりに微弱であり、さらに国際的に孤立していた。時折胸の中にもつた現実者としての苦悩がこみあがってこないではなかったが、苛酷な検閲制度の下ではただ忍従せざるをえず、諦観の世界にしか開かれる道はなかったのだ⁽⁴⁹⁾。▽

以上は主人公の植民地時代の生き方を述べた件りである。では主人公はこうした生き方を解放後に反省したとでもいうのだろうか。しかし彼の加わっていた団体は彼が反感をいだいていた△左翼▽の団体であり、依然として玄の彼らに対する感情には変わりがなかったとある。玄は相変らず彼らに対して気を許しはしなかったし、彼らの先ばした行動には危険を感じ、再三不愉快な思いもしている。にもかかわらず共に行動し、外から彼らと同一視されることをも甘んじて受けさせる何らかの根拠がなければならぬ。主人公は解放後のソウルに上京し自分を訪ねてきた金直員と次のような会話を交す。

△「ところでなんだったわが玄どのは共産党に入られた？」

「わたしは共産党に入ったとでも言うんですか？」

「評判ですぞ。玄どのがどうやら利用されていると。」

「直員先生も、わたしに対してそう思っておられるのですか？」

「玄どのが進んで変ったのかもしれない、だがひとにたぶらかされるお方じゃないことは、わしゃわかっております。」

「ありがとうございます。で、変ったというのも、そうですね。わたしがいっぱし何かはつきりした態度をとってたわけでもないですし、原因は解放前にはわたしの友人が大部分消極的な処世家だったからです。わたしは解放後にも依然として処世だけで仕事をしないのには反対です。」

「解放後だとて人の道理がなくなりますかな。君子は嫌疑の間に処せずですぞ。」

「私はそうじゃありません。今この時代には李下にも曲った冠を正さぬのは賢明どころか愚かです。処世主義は自分一人だけを考える態度です。嫌疑どころか危険だって冒して仕事をしなければならぬ、民族的にいちばん緊迫した時期だと思つてます。」

解放前には苛酷な弾圧の下にあったので処世のみを考えざるをえなかったが、そうした抑制のなくなった解放後は民族のため仕事に乗りださねばならぬとするなら、これは過去への反省からでたとするには安易な論法で説得力を持ちえない。これはこの作品の背景となった時期がへ緊迫したへ激動の時代だったことを無視しているのでも、玄の行動の是非を問題にして言っているのでもない。玄の言葉に作家として自己の創作的営為の重さについての考慮がはらわれていないことに對していわれているのである。結局玄は金直員をへ啓蒙へできずに終つてしまふ。

戦争末期の鬱々とした時勢の中で金直員は玄にとって無二の話し相手であった。亡びた大韓帝国を偲び英親王を慕う金直員をへその人玉の如しへと礼讃した時の玄が自己を偽っていたとは思われぬ。ところが今やソウルを去り行く

金直員の姿は玄にとって△この世界史の大思潮の中に▽沈みゆく△ひとかけらの塵の如く▽思われるばかりだった。しかしこうした金直員の描写はこれまでの李泰俊の作品に登場する落後した老人の感じを与えず、逆に主人公の心の冷たさを浮き上らせる結果になっている。抑えられた時代を共に語り合うことができたのは決して相手が△一朝有事の際には当然同志▽となりうるからではなかった。主義主張のいかににかかわらず、日本が快しとせぬ言動が互いを結びつけた、そのような時代であつたからである。それにもかかわらず、共に語り合うことでその時代を△生きたことに堪えぬ▽ことができたのは玄にとつて決して決しておろそかにできぬ事柄であつたはずである。

玄が金直員を冷やかに見送ることができたのは、自分が現在にかかわっている関心事に比べれば彼のことはかかずらつておられぬ小事とみなしえたからである。玄には自分が使命を帯びて仕事をしているという自負があつたようである。その使命感があればこそ、自分が氣を許してもいない者達の間で何度か不愉快な思いをしながらも留まつておられたのである。△彼らと別れたとて数では彼らにまけぬだけの文学団体だつて、文化団体だつて作れるという自信もわき上つた。しかし……。しかし……。▽それにもかかわらず留つた理由は彼らの団体の責任者達の態度の真摯さのためであるという。△階級革命の先走りせず▽△左右を問わず民族が進むべき路線での行動統一からまず原則▽とする彼らを信ずることにあつたという。しかしこれは弁明の色彩が濃い。赤旗散布や垂れ幕の件があつたにもかかわらず、彼らが反省をし、また自分も自己に課せられた使命を重んじて自重し留まつたという外部向けの釈明である。この作品において主人公の行動を支える根拠について合理的な説明はどこにもなされていまいとみるべきである。政治情勢に関する説明が随所に折り込まれているその分だけ主人公が自己の行動に関して擁護されえぬものを擁護せんとしている点が顕になっている。主人公の使命を帯びているという自負心の根拠は主人公自身に求められねばならぬ。それは自分が民族の運命の担い手であるという自信からきていると思われる。それを主人公は△良心▽と表現している。しかし抑えつけられていた時代を不安の内に△ただ生きたいというよりは生きることに堪えぬ▽きたいとい

う思いで過してきた時期の自己に対する考察を抜かした民族の運命の担い手の良心がいかに軽々しいものであったか、このことをこの作品が示しているのである。

四

李泰俊はソ連旅行の直後に北に留まることを決定している⁽⁵¹⁾。はたしてソ連旅行が彼の以北選択の要因なのかははっきりせぬ。李泰俊達の一行が平壤の飛行場を出発したのは一九四六年八月十日。それから十月十七日再び平壤に戻るまでの二ヶ月以上の間、一行はウォロシロフスクを起点にモスクワ、アルメニアの主都エレワン、グルジアの主都トビリシ、スターリングラード、レニングラード等の都市を訪問。大学、博物館、劇場、官庁、農場等各地を案内されて廻る。『蘇聯紀行』はこの時の旅行記である⁽⁵²⁾。

李泰俊のこの書に接する者は誰しも啞然とするだろう。それほどにこの紀行文は彼の変身ぶりを如実に示していると思われるのである。『蘇聯紀行』は全篇ソ連の現状に対する好意的説明と礼讃に満ちている。この書に対しては出版直後に辛辣な批評が書かれて⁽⁵³⁾いる。李泰俊の叙述ぶりがいかなるものであったかをこの批評の主の言葉をかりてみることにする。

この書にあらわれているのは、まず李泰俊のソ連に対する無知と観察の目のなさである。過去にもソ連に関する文献は決してなかったわけでもなく、それらが悪宣伝ばかりであったわけでもなかった。李泰俊はその事実を歪曲している。実際は植民地時代の朝鮮人にとってソ連は憧憬と礼讃の対象だったはずなのであるから、彼ら一行がなすべきことは、果してソ連がそのような対象としてふさわしい現実を備えているかどうかを確認することであった。李泰俊は、現地に行かねばソ連のことはわからぬのだから、自分の目で現状を現状のままに見よと言う。だがその実、彼が行なったのは案内人に導かれ、案内人の説明をうのみにする態のものではなかったのか。ジイドを持ちだすまでもなく

親切な案内人に導かれた見物はすべてを美しく快適にみせるものである。本当に真実が見えはじめることは自分の足で歩きだして初めて可能になるのである。李泰俊は全くそのことを念頭においていない。はたして彼が現実を真に見ようとしたかは疑問である。次に彼の卑屈な態度と阿諛である。案内人達の説明をうのみにするだけならともかく、さらに相手におもねりまでして調子を合わせる必要はなかったはずである。例えば宗教委員会を訪問した際、「反宗教的言論に自由がありますか？」などと質問しているが、宗教的宣伝の自由のないところでこうした質問ができるとは彼らは使節団ではなく阿眉の群にしか過ぎぬ。そして李泰俊の矛盾にみちた叙述である。帝政時代の將軍クトゥーゾフをたたえソ連の革命精神に容馳する彼らの国粹主義を称讃しながら、朝鮮における封建的遺制の打倒、国粹主義の排撃を唱えている。△結局氏にはこの紀行を草すに際して原則的に要求される「ソビエトに対する敬愛」、「自国の現状に対する深い理解」の中の一つもなかったことを結論してよいことになるのである。

以上は黄中燁の『詩作と真実』に書かれた批判から断片的に拾いだして綴ったものである。おそらくこの批判は妥当であり李泰俊とても反論の余地はなかるう。彼にこの紀行文を書かせた動機がどこにあるかはわからぬが、この紀行文に満ちている彼の無邪気さにはもしかすると米軍政下において政治にかかわってきた煩わしさと緊張を逃れた解放感が作用していたのだろうか。だがそれにしても彼がそれほどまでにしてソ連を擁護すべき理由はなかったはずである。黄中燁によればソビエトは当初の永久革命の理念を放棄した代りに排外主義を軸にした愛国心を煽り、不断の非常手段の乱発による強圧政治の国と化し、国民には外部との接触を断つことで希望と信頼と無知を強要し幸福感と優越感をうえつけている国となる。そして弱小国家としての朝鮮が警戒せねばならぬのはその背退主義の宣伝と帝国主義的野望であるという。李泰俊がこうした見解の存在に無知であったとしても、旅行中現実のソ連に見られる画一主義や新たな階級の発生に気づかぬはずはなかった。しかし彼はそれをありのままに見るだけではすまさなかった。

△学校に名もなく、校訓の如きものも別になく、学期試験問題も教育省から出され、こうしたあまりにも一律的で

あることにあつてはこの一面だけ見て蘇聯の教育方針は画一主義だと速断され易い。しかし学生達の個性が学校だけでは無視されているようにみえながら事実においてはそれと反対であることを理解しうる。学校からして実力さえ良ければ越級させる。ある専門的な素質があれば中途で児童専門学校に行く。その外にも知能が普通以上でありさえすればピオニールに通い自分の個性をいくらでも独自の研磨させることができる。学生だけでなく工場であれ、農村であれ、働く人々も生れつきの素質さえあればその文化部を通して音楽に素質ある者は音楽を、文才がすぐれた者は文学を専門に転出成功する道がある。⁽⁵⁴⁾ V

「一等車に対して」ところで蘇聯は今まさに「全てが無差別な社会」に改造されつつある。まず根本的で緊要なものから無差別になつてゐる。将来は全てが無差別の可能性が整えられつつある社会だと考えれば理解される。準備がすっかりできる前に機械的にこうした等級を無くすことからやつたとすれば実際においてこれは文化の後退であり秩序の混乱なのだ。一等車を残して全ての人民が一等車にふさわしいように生活文化を引き上げ、そして二、三等車を無くし一等車のみを作るのが実際において合理的な順序なのだ。⁽⁵⁵⁾ V

無残な文章である。ここにみられるのは一度肩入れしたものに對する徹底したこじつけと合理づけである。同様な文章は随所にあらわれる。『蘇聯紀行』が「擁護されえぬもの」に對する擁護Vの姿勢でつらぬかれ、すでに誰かによつてととのえられている言葉の断片を長くつなぎ合わせて全くの詐術でしか述べられぬような結果を作りだしているVのはこの紀行文が政治の文章で書かれてゐるからであることになるのだらう。⁽⁵⁶⁾

政治的思想が確固としてゐると思われぬ李泰俊によつてこうした文体が採用された結果、断言を無邪気で大膽にしている反面、文章の無残さを如実に現わすことになった。しかしこうした筆法は「解放前後」にもみられたものである。したがって『蘇聯紀行』は小説ではないにせよ「解放前後」と同系列の著作であり、李泰俊の変身と思われるものがその深層においてはみかけほど變りのないものであることがわかるのである。

次に彼が北に渡ってから書いた長篇として『農土』がある。⁽⁵⁷⁾北朝鮮では一九四六年三月五日に「北朝鮮土地改革に關する法令」が發布され作家達には「土地改革」を主題にした作品をかくように方針がだされたというので、おそらくこの線に沿って書かれたのではないかと思われる。⁽⁵⁸⁾

千芑伊（チョンドリ）、億釗（オクセ）の父子は尹判書家の下人であった。主人の家の出産と億釗の母の病死が重なったので、不浄を嫌って彼らは黃海道カジェウルの本家に行かせられる。ここで億釗は農民達の働く姿をみて自分も小作でよいから田畑を耕したいと思う反面、彼らの生活をみて小作制度のあり方に疑問を感じもする。しかし地主の家に雇われていることからいつしか自分も主人の威を借り農民に対して高圧的な態度をとるようになってゆく。やがて日本からの資本の進出で主人の家は破産。億釗父子は主人から資金をもらって独立し農民達の仲間入りをするが、農民達の方ではそれまでの億釗の態度を根に持つ様子もなかった。しかし自作農になりたいという思いはかなえられず、他の農民達と共に東拓の小作人となる。ここで東拓の小作料徴収のからくりを身をもって知り小作人の悲哀を味うのだった。こうした彼らのところにも農民が立ち上って闘うことを訴える使者がやってくる。ある日の夜、山の中で秘密の集會が開かれるが、たちまち主謀者以下全員逮捕される。参加した一人である億釗も一ヶ月あまり拘留される。やがて日本の戦争もたけなわになり親日派が幅をきかす頃億釗親子は家を奪われ、互いにばらばらになる。父は労役にかり出されやがて病死、億釗は自分の恋人を奪おうとする面長の子を打ちのめして逃亡。鉾山で解放を迎えた億釗は村に帰ると逃げた面長の家を自分のものとし晴れて結婚式を挙げる事ができた。やがて北朝鮮には「土地改革令」が發布される。土地制度の急激で極端な改革はさまざまな摩擦を引き起す。億釗にもその主旨に關して釈然とせぬものがあつたが、農民大会に出かけ説明を聞くうちに疑問は解消する。新たに選ばれた農村委員に億釗も加わる。こうして短期間の間に成長した彼は新たな社会、新たな朝鮮を担って進み始めるのだった。

以上が梗概である。この小説が作者の自由な発想で書かれたかどうかには疑問が残るが、さしあたってこの点を不

間にすれば、農地改革を主題にしたこの作品は李泰俊の長篇小説を考える際に新たな意味を持っていると思われる。まず主人公の設定において、従来の作品の主人公がほとんど学生であったのに反してここで農民をとり上げたことである。これは従来の場合のように何らかの形で作者の体験をもとにすることができず全く新たに構想をせねばならなかったことを意味する。しかも「第二の運命」のように農村啓蒙運動として扱わず下人を主人公としたことは異色的である。次に目前に進行中の具体的な課題をとりあげたことである。従来の長篇においては民族意識を抛り所にして観念的な方向を示唆するにとどまっていた。解放によってたとえ抑制が外れたとはいえこうした課題をもって作品化することには文学作品として相当な危険が伴わねばならなかったはずである。以上の点についてさらに検討してみたい。

たしかに主人公億釗の選択は新しい試みだった。李光洙の「土」や沈薫の「常緑樹」のように農村啓蒙運動をする知識人としなかったのは農民小説としては一歩進んではいる。しかし小説中の主人公の扱いは李泰俊の従来の作品に比べてさほど掛け離れているわけではない。逆境に生きる主人公の運命を扱っている点では共通しているのである。ただそれにもかかわらず小説の展開が平板である感を免れえぬのは、主人公の生を支える内発的な情熱が織り込まれておらず土地を所有して搾取のない社会に生きたいという願いが切実に表現されていないことや、成弼^{ソンピル}らの抗日運動や粉伊^{ブンイ}との恋愛が主人公に生の葛藤をもたらすものとして描かれていないことによると思われる。そこには初期の作品にみられるひたむきで無理強いとも思われる自己主張はない。この点でこの作品は植民地時代を生きながら次第に緊張感を弛緩させつつ自己合理化を完成させていった後期の作品系列の延長上に位置づけられるだろう。この点は現実に行きつあった土地改革問題を扱う結末部分において歴然としてくる。

一九四六年北朝鮮で実施された土地改革令には、日本人や親日家や反逆者の土地のみならず、全所有地を小作させている所有者の土地^ⅴや^ⅵ面積にかかわらず、継続的に小作させているすべての土地^ⅴを没収するものと

規定してあった。もし地主が自作を希望しても所有地の没収は免れえず、農民と同等の権利をもって他郷において土地を与えられるのであった。⁽⁹⁾当然無理が伴った。農民大会に赴く主人公億釗にとっても氣にかかることがあった。安寡婦の件だった。夫を亡くし女手一つで農作、行商をして蓄えた元手で土地を手に入れ一家を支えてきた彼女の土地も、たとえ一人しかないとはいえ小作人を雇っている地主の土地に該当し没収されるというのであった。以下は億釗夫妻の会話である。

「誰にきいたって安寡婦のとこみたいな土地とり上げるのは間違ってるのよ。」「安寡婦んこの土地まで法にふれるその理由さえわかれば土地改革のことは一安心かい。」「いいえ。」「まだ他に?」「土地改革だなんていって家までなんでとり上げるの?」「そりゃまあ……。」「あんたも行くならよくわかってからにしないよ、もう。」「地主達の家をとり上げる理由までわかりや安心なのか?」「うん。」「わしも今、その二つのために釈然とせんのだ。けどどわしは今こんなふうに思うんだ。」「どう?」「権生員が、これこれが間違ってる、おかしいとやらそうに言々と、わしやおまえは言い返せんが、だが権生員の話に人民委員会や農民組合が答えられんなんてことがあるかな。」「それもそうね。」「わしらや権生員が間違つとるとはつきりささんならんぐらい上の方で何も知らんとか、知つとっても無理おしにするはずはなからう。」「そう考えればそうもいえるけど……。」⁽¹⁰⁾「V」

そこで億釗は、だから何かいきさつがあるのさ、Vと言ひおいて出かけてゆく。ここで主人公の持っている態度は、不合理に思われる点に対する疑問を疑問としてつきつめることをせず、その不合理が合理化される理屈を見つける式のものである。その理由づけを主人公は崔初試から聞かされる。地主が土地を没収されるのは、地主は暮らしていた村を離れねばならぬので自然に住んでいた家は不用になるからである。住んでいた土地を離れねばならぬのは、ただ地主ということで勢力をふるっていた旧い環境からすっきりと身を引いて彼自身も新たな人間として解放Vされねばならぬからであり、Vそうして主従関係の全くなかった自由平等の世の中でいざ新たな美風良俗をうちたてVんがため

である。安寡婦の件に關して言えば、△事はささいな事情にひきずられるのではなく原則のままに成されねばならぬ▽ことを考えねばならぬ。△ささいな事情にひきずられるのは、それはすでにごまかしを行う根性が生じる余地を与えている証拠▽になるものであり、△一寸人情味が無いように思われても事は原則的に進められねばならぬ▽のであった。主人公は崔初試の言葉を全面的に受け入れるのみならず、さらにそれを自己の意見として大会の場で発言する。

△この土地改革は我が朝鮮にかつて無く将来にもまたと無い素晴らしい事業です。また色々と議論の多い事業です。人民委員会で立派な方々が考えに考えを重ねて決定した法令です。あそこのお婆さん（安寡婦の姑）のような事情、いやもっと気の毒な事情も全朝鮮にはいくらもあるだろうということを、その方々が知らなかったはずがありましようか。みんな考慮した上で考えぬいて決定した法令であることをわたしたちは信じねばなりません。だとすれば、わたしはまだこうした事情を考えるのに是非を下しはしません、ただ法令の通りになっているかどうかをはつきりさせ決定をすれば、法令違反にもならなく、わたしたちが呼び起した同情心も同情心として生かせるのです。⁽⁸⁾▽

こうして主人公は疑問を解消する合理づけを自分のものにしてしまう。一度こうした論法を獲得すれば安寡婦に対する同情心を切り棄ててしまうのみならず罪人として断罪することも可能となる。

△よしや自分の力だけで稼いだ金だともしてみよう。それをそのまま使うとか、それを元手にどんな仕事であれ自分の手を使ってやる仕事をしてやってくべきなんで、どうして他人の汗水たらすのを横取りしようなんて土地を買ったんだ。畑仕事を自分の手でやる前に土地を買うこと、それがもうけしからん根性なんだ。⁽⁹⁾▽

李泰俊がこのような主人公を創り出したことはさほど驚くに値しない。すでにみた「解放前後」から『蘇聯紀行』を経てここに至る道は一筋に連続している。この過程で李泰俊がある政治思想を獲得したとか政治的立場を確立した

という必要はない。『農土』の主人公が新たな制度を納得して受け入れたように作者も同じ態度をとりえたかどうかを言う必要はない。ただ億釐が自分を納得させるに際して用いた論法は、李泰俊のものであり、この作家が解放後の作品を通じて完成させてきたものである。

五

桂鎔黙の短篇に「星を数える」という作品がある。解放直後の世相を描いたこの作品の結末部分に、生活に窮して三十八度線を越えようとやってきた南北からの難民が互いに出合い、それぞれ相手の話から軍事境界線の向う側も自分の逃れんとしてきた所とさして変りのないことを悟る場面がでてくる。以上で紹介してきた李泰俊の作品が書かれたのはそのような時代であった。一方を棄てることは他方を選択することを意味しない。あるものが不当であっても他のものが正当化されるわけではないのである。この点は現在においても当時の作家達を扱う際の前提として変りはない。

「解放前後」の主人公と同様に李泰俊もこみあげる人現実者としての苦悩を抑えつつ植民地時代を過してきたことであろう。現実者でありながら作家でもあった李泰俊が作品の中に盛り込んだ民族意識は、抑圧された状況のもとでは、たとえそれを全て言い切ってしまうずとも暗黙の了解で通じあうものが読者の側にもあったはずである。それがいかに漠然としたものであったにせよそれなりの意味をもちえたし、また緊張感をもたらすこともできた。李泰俊が自己の存在意義を民族意識に求めえたのもこの緊張関係があったためである。たとえそれが彼の自己合理化を意味していたにせよ抑えられた状況のもとではそれ以上のものにはなりえなかった。

日本の敗戦による植民地支配の消滅は同時にこの緊張関係の消滅でもあった。植民地時代に培ってきた民族意識が新たな時代を迎えてその水準を問われる時であった。作家としての李泰俊にとって「不死鳥」は、たとえ過去の作品

のやきなおしであったにせよ再出発の起点を与える作品となるべきものであった。主人公の設定は彼にとって未だ清算されていない問題の存在を示唆しており、それが彼の解放後の創作の原点となりうる可能性を与えていた。しかし彼はあまりにも常識的な啓蒙家としての面を性急に押しだしてしまったようである。これは民族語の守護者として「文章講話」を執筆した李泰俊の姿に通じる。植民地支配からの解放が緊張関係からの解放とされるに伴って、現実者としての李泰俊と作家としての李泰俊が分離してきたのであった。

△胸の中につもった現実者としての苦悩△を押しつつひたすら△生きることに堪えぬき△たいという思いで生きてきた作家としての李泰俊が創作的営為の重さを測りそこねた時、現実者としての李泰俊が正面に出てきたのであった。創作を通して培われてきた民族意識と自己の合理化は現実者としての李泰俊の装いとして採用される。それが「解放前後」の作者であった。作家としての李泰俊は民族の将来の担い手である現実者としての李泰俊を支える政治的文章の筆者としての役割りを果たしている。『蘇聯紀行』・『農土』において「解放前後」の文体はいっそう発展し完成させられた。そこにみられるのは一度肩入れせんとすれば擁護されえぬものが全て正当化される文章の書き手としての李泰俊の無残な姿である。ここに至るまでの軌跡を辿ればその源はおそらく彼が作家活動を始めた初期の時期にまで達することであろう。

〔註〕

- (1) 白鉄『文学的自叙伝—真理と現実—後篇』（博英社、一九七五・五、再版一九七六・十） pp. 294-295。
- (2) 上に同じ。 pp. 296-297。
- (3) 上に同じ。 p. 299。
- (4) 朝鮮文学者同盟機関誌『文学』創刊号（一九四六・七） p. 198 および『ソウル新聞』一九四五・九・二七付記事「救恤に芸術陣総動、文化建設協議会の多彩な贈り物」参照。

(5) それまでの経過は次の如くである。

一九四五・八・十六 「朝鮮文学建設本部」結成。

八・十七 苑南洞にて準備会。

八・十八 「朝鮮文化建設中央協議会」第一回協議会。議長林和、書記長金南天など。

九・十五 「朝鮮プロレタリア音楽同盟」・「同美術同盟」結成。

九・十七 「朝鮮プロレタリア文学同盟」結成。

九・二七 「朝鮮プロレタリア演劇同盟」結成。

九・三十 「朝鮮プロレタリア芸術同盟」結成。

十二・六

午前十一時、文協会館にて合同委員会。出席者、李泰俊・李源朝・林和・金起林・金南天・安懷南・尹基鼎・權煥・韓曉・朴世永・宋完淳。朝鮮文学同盟結成で合意。

十二・十三

午後一時文協事務室にて「朝鮮文学同盟」結成。韓雪野・李箕永・金史良も参席。

(6) 陣営は次の通り。主幹李泰俊、主筆朴致祐、編輯長金起林、外報責任者金永健（『ソウル新聞』一九四六・三・二四付記事による）。『現代日報』はこの年九月に米軍司令部布告第二号違反により停刊処分をうける（『ソウル新聞』一九四六・九・七付記事）。

(7) 鄭飛石『小説作法』（新大韓圖書株式会社、一九四九・八、再版十一月）付録「現代作家総覧」p.291。

(8) 方峻遠『李泰俊論』（『白民』五号、一九四六・十、p.26-28）p.26。

(9) 七月一日の「水害救済文芸講演会」で李泰俊は開会の辞を述べており（『文学』二号、p.13）八月十日（十一日）にソ連に向け出発している。

(10) 李泰俊『蘇聯紀行』（朝鮮文化協会・朝鮮文学同盟、一九四七・五）なお『民聲』一九四七・二・一付p.46によると八月十一日に出発したことになる。

(11) 九月六日、朴憲永、李康国、李丹河ら共産党幹部に逮捕状が発せられた。

(12) 朴貽遠『南労党総批判』（一九四八）（金南植編、『南労党研究資料集、第二輯』亜細亜問題研究所、一九七四・八に収録されたものによる）p.326。

(13) 李泰俊「ソウル文学同盟の友人の皆に」（『文学』二号、一九四六・十一、p.28）では十月二十日平壤で再びソウルに帰れ

ぬことになったことを告げている。

- (14) 六月二六、七兩日に亘って従軍作家が南下してきたが李泰俊は別途にやってきたという。崔泰応「李泰俊の悲劇（下）」（『思想界』百十七号、一九六三・一、pp. 315—321）p. 316 参照。

- (15) 白鉄 前掲書 p. 407。

- (16) 崔泰応「李泰俊の悲劇（下）」p. 319 及び鮮于輝「拉北されたり越北した文人達の問題」（『根深き樹』十五号、一九七七・五、pp. 68—71）参照。

- (17) 事件そのもののおおよその経過は次の如くであった。

一九五二・十～十二 林和を手始めに金南天・金起林・金午星・権五稷の逮捕始まる。

十二・十五 朝鮮労働党中央委員会第五次全員会議における全日成の報告「労働党の組織的思想的強化は我々の勝利の基礎」において文化人の中にある宗派主義攻撃。

一九五三・一～三 思想検討作業始る。

二・七 朝鮮人民軍創設五周年式上朴憲永、公式の席への最後の列席。その後逮捕。

二・十五 労働新聞社説「不正な者は我が党に列する資格はない」で朱寧河・林和・金南天・チョイルへ等に対する厳しい攻撃。

三・五 朴憲永副首相兼外相を解任さる。

八・三～六 李承燁・趙一鳴・林和・朴勝源・李康国・裴哲・尹淳達・李源朝・白亨福・趙鏞福・孟鐘鏞・薛貞植に対する軍事裁判、十名に死刑。

一九五五・十二・十四～五 朴憲永に対する最高裁審判。死刑。

おおよその経過については R. A. Scalapino & Chong-Sik Lee; *Communism in Korea, Part I, The Movement*. University of California Press. 1972. pp. 436-462. を参照。

- (18) 李泰俊・金南天の名は李承燁らの裁判記録に登場する。このうち金南天は前注にあるように五三年二月十五日に公式に批判されているので、おそらく何らかの形で処分されたものと思われる。李泰俊に関しては次の通りである。

一九五四・初頭 三ヶ月間の思想検討作業の中で李泰俊過去を追求される。

一九五五・十二・二八 党宣伝煽動活動家に対して行った全日成の演説「思想事業において教条主義と形式主義を退治し主体を

確立することに關して」で李光洙・朴昌玉・李泰俊を批判。

一九五六・一・十八

朝鮮労働党中央委員会常務委員会決議「文学・芸術の分野における反動的ブルジョア思想との闘争をい
こう強化すべきについて」(未見)で林和・李泰俊・金南天批判。

二・二五

平壤市党管下文学芸術宣伝出版部門熱誠者會議で韓雪野の行った報告において林和・金南天・李源朝・
李泰俊・鄭律ら批判。

十・十四〜六

第二回朝鮮作家大会冒頭で韓雪野の行った報告「戦後朝鮮文学の現状と展望について」で林和・李泰俊
・金南天批判。

(19) 李恒九『北韓作家達の生活相』(国土統一院調査研究室、一九七九) p. 120°

(20) 上記同じ。pp. 121, 255°

(21) 上記同じ。pp. 154-155°

(22) 檄文の内容は白鉄『文学的自叙伝』(既出) p. 297° ビラの記事は『資料大韓民国史、1』(国史編纂委員会、一九六八・十二)
pp. 22-25 を参照。

(23) 白鉄『文学的自叙伝』(既出) p. 305°

(24) 朝鮮プロレタリア文学同盟の網領は『ソウル新聞』一九四五・九・十九付および『芸術運動』創刊号(一九四五・十二)
pp. 124-125 215-221 内容のものが載せられている。

(25) 白鉄『文学的自叙伝』(既出) p. 330 によれば林和が『文化戦線』(一九四五・十一)に書いた文では、まず労働者・農民の統
一戦線による民主主義革命が先決であることを主張していることになるが、これは八月テーゼ「現状勢とわれわれの任務」の
線に沿ったものと思われる。

(26) 李泰俊「随想―履霜」(『ソウル新聞』一九四六・一・一付、四面)。ここで信託統治に反対しているのは朝鮮共産党が信託統
治案賛成を声明する一月二日以前に書かれているからで、文学同盟も託治反対声明を出していた(『ソウル新聞』一九四五・
十二・二九付記事参照)。

(27) 例えば「第二の運命」、「不滅の喊声」、「聖母」、「農軍(農民、農夫)」がそれに該当する。

(28) 崔泰応「李泰俊の悲劇(上)」(『思想界』百十六号、一九六三・1° pp. 288-294) pp. 291-292 および「北韓文壇」(『解放
文学20年』正音社、一九六六・1° pp. 79-86) pp. 81-82 参照。

解放後の李泰俊(三枝)

- (29) 白鉄「まことに良き作家達だったのに」（『月刊中央』百二十三号、一九七八・五、pp. 294-305）p. 302°
- (30) 白鉄『文学的自叙伝』（既出）p. 360°
- (31) 白鉄「まことに良き作家達だったのに」（既出）pp. 302-303°
- (32) 例えば言語文学研究所文学研究室『朝鮮文学通史（下）』（科学院出版社、一九五九・十一）pp. 222-225, 274 および社会科学文学研究所『朝鮮文学史（一九四五—一九五八）』（科学・百科事典出版社、一九七八・十）pp. 156-158 を参照。
- (33) 合同の後プロレタリア文学同盟系の多くが三十八度線を越えて北に行ってしまったという（安懷南「文学運動の過去一年」『百濟』第二号、一九四六・一、p. 9）。北での話は色々あるらしいが、例えば嚴浩爽が「典型性のいくつかの問題に対して」で金南天を攻撃したこと（李喆周『北の芸術人』啓蒙社、一九六六・一、pp. 90-91）や李泰俊の『蘇聯紀行』が北で出版されずまず南で出版されたこと（玄秀『赤治六年の北韓文壇』『国民思想指導院』一九五二・三、pp. 89, 96）などがその現われという。注18の一九五六・二・二五における韓雪野の報告でも合同のいきさつについて不満があったことがうかがえるようである。
- (34) 注33の文献参照。
- (35) 注33の文献李喆周、pp. 90-103 および玄秀、pp. 93-96° また崔泰応「李泰俊の悲劇（下）」（既出）p. 316°
- (36) 李喆周『北の芸術人』（既出）p. 70°
- (37) R. A. Scalapino & C. S. Lee; "Communism in Korea"（既出）p. 318°
- (38) 例えば『蘇聯紀行』の執筆や『農土』において「金日成將軍」の名が三度も現われること（pp. 161, 178, 204）はこのことに関連するのかもしれない。
- (39) 李承燁らに対する裁判記録（『南労党研究資料集、第二輯』既出）では起訴状中、李源朝の陳述に李泰俊・金南天の名が挙り（p. 466）、林和に対する訊問中に李泰俊の名が（p. 506）、李源朝に対する訊問中に金南天の名が（p. 567）登場する°
- (40) 注18参照。外務省アジア局・霞関会編『現代朝鮮人名辞典、一九六二年版』（世界ジャーナル社、一九六二・八）によれば朴昌玉、奇石福・鄭律は皆一九五六年一月に各々の職を解任されているからそれより前に批判されていたことになる。李喆周『北の芸術人』（既出）pp. 222, 236 参照。
- (41) 南においては機会あるごとにこの文学史のタブーを無くさんとする動きが表面に出る。一九六三年、一九七七年、八二年に越北作家が論議されたものこの底流の存在を示している。また崔仁勲『小説家丘甫氏の一日』（文学と知性社、一九七六・十二）pp. 245-247 の記述も参照。

- (42) 『ソウル新聞』一九四六・五・十付「新緑短篇リレー」予告。
- (43) 梁泰鎮「越北作家論」(『統一政策』四卷二号、一九七八・七、pp. 56-80) p. 61。
- (44) 李泰俊「時代性と芸術性」(『ソウル新聞』一九四六・一・二五、二面)。
- (45) 李泰俊「不死鳥」(『現代日報』一九四六・三・二八・七・十九、90回中断)。
- (46) 「不死鳥」79回(一九四六・六・三〇)。
- (47) 使用した資料(ソウル大学中央図書館蔵)ではこの後数回抜けていて話の進行がつかめない。
- (48) 李泰俊「解放前後―ある作家の手記」(『文学』創刊号、一九四六・七、p. 439)。日本語訳としては田中明氏の訳が『現代朝鮮文学選2』(創土社、一九七四・八)に収録されている。
- (49) 『文学』創刊号、p. 15。
- (50) 上に同じ。p. 30。
- (51) 注13参照。
- (52) 李泰俊『蘇聯紀行』(朝鮮文化協会・朝鮮文学同盟、一九四七・五)。この作品を利用することができたのは梶井陟氏の御好意による大きい。
- (53) 黄中燁「詩作と真実―背信的革命」(真誠堂、一九四八・十)。内容は『蘇聯紀行』の批判の他にソ連の現状批判およびトロツキーの「裏切られた革命」の概容からなる。著者は数学者で他に著作『新興自然科学通論』がある。なお父親は平壤「朝鮮文化協会」初代委員長だったというが、当時ソ連映画の配給機関で朝鮮文化協会・文芸総の資金源だった「人民映画会社」の社長黄甲永と同一人物かも知れない。玄秀『赤治六年の北韓文壇』(既出) p. 19 参照。
- (54) 『蘇聯紀行』pp. 224-225。
- (55) 上に同じ。pp. 199-200。
- (56) George Orwell: Politics and the English Language, in *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, Vol. IV. Penguin Books 1970, 1978³ pp. 156-170 ⑥中⑥言葉。
- (57) 李泰俊『農土』(三星文化社、一九四八・八)。
- (58) 玄秀『赤治六年の北韓文壇』(既出) pp. 25-28。
- (59) 「北朝鮮土地改革に関する法令」第三条および第六条参照。

- (60) 『農土』 pp. 171-172°
- (61) 上に同じ° p. 184°
- (62) 上に同じ° p. 201°
- (63) 桂鎔熙「星を数える」（『解放文学選集』鍾路書院、一九四八・十二、pp. 34-53）°